

# 4 国 語

## 国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1 次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 郷土資料館の学芸員から話を伺い、町の歴史を学ぶ。
- (2) 麦茶を冷やすために氷を砕いてグラスに入れる。
- (3) 地道な清掃活動が周囲に良い影響を及ぼす。
- (4) 入念な準備により、会議が円滑に進む。
- (5) 産業遺産を観光バスで巡る。

2 次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で

書け。

- (1) 朗読劇で主人公の役をエンじる。
- (2) 研究のためにムズかしい論文を読む。
- (3) 決勝でシुकメイの相手と対戦する。
- (4) 兄は、早朝のジョギングをシユウカンとしている。
- (5) 保育園で園児たちのスコやかな寝顔を眺めて気持ち气和む。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

目覚ましをセットした時刻を三十分も過ぎている。知らないうちに止めて、またうとうととしてしまったらしい。慌ててパジャマのまま台所へ飛んでいくと、ヨシ江えが洗い物をしているところだった。

「シゲ爺じいは？」

「ああ、おはよう。」

「おはよ。ねえ、シゲ爺は？」

「さっき出かけてっただけ。」

「うそ、なんで？」

ほんのちよつと声をかけてくれたらすぐ起きたのに、どうして置いているのか。部屋を覗いた曾祖父おぢい母が、〈よく眠ってるだわい〉〈可哀想だからこのまま寝かせとくだ〉などと苦笑し合う様子が想像されて、地団駄を踏みたくなる。

「どうして起こしてくんなかったの？ 昨日あたし、一緒に行くって言ったのに。」

するとヨシ江は、スポンジで茶碗ちawanをこすりながら雪乃ゆきのをちらりと見た。

(1) 「起こそうとしただよ、私は。けどあのひとが、ほっとけって言うだから。」

「……え？」

「雪乃が自分で、\*まっと早起きして手伝うから連れて行って言っただわ。こつちが起こしてやる必要はねえ、起きてこなけりや置いてくまでだ」って。」

心臓が硬くなる思いがした。茂三しげぞうの言うとおりで。

(2) 無言で洗面所へ走ると、超特急で顔を洗い、歯を磨き、部屋へ戻ってシャツとジーンズに着替えた。ぼさぼさの髪をとかしている暇はない。ゴムでひとつにくくる。

土間で長靴を履き、

「行ってきます！」

駆け出そうとする背中へ、ヨシ江の声がかかった。

「ちよつと待ちない、いってえどこへ行くつもりだいや。」

雪乃は、あ、と立ち止まった。そうだ、今日はどの畑で作業しているか

を聞いていない。

「そんなにまっくろけえして行かんでも大丈夫、爺さんは怒っちゃいねえだから。」

ヨシ江は笑って言った。「まっくろけえして」とは、慌てて、という意味だ。目の前に、白い布巾ふきんできゅっとくるまれた包みが差し出される。

「ほれ、タラコと梅干しのおにぎり。行ったらまず、座ってお食べ。朝ごはん抜きじゃあ一人前に働けねえだから。」

「……わかった。ありがと。」

「急いで走ったりしたら、てっくりけえるだから、気をつけてゆっくり行くだよ。雪ちゃんが後からちゃんと言ってくつて、爺さんにはわかってただわい。いつもは出がけになーんも言わねえのに、今日はわざわざ『ブドウ園の隣の畑にいるだから』って言ってつただもの。」

再びヨシ江に礼を言って、雪乃は外へ出た。

あたりはもう充分に明るい。朝焼けの薔薇色ばらいろもすでに薄れ、青みのほうが強くなっている。すっかり春とはいえ、この時間の気温は低くて、息を吸い込むとお腹なかの中までひんやり冷たくなる。

よその家の納屋なやに明かりが灯ともっている。どこかでトラクターのエンジン音が聞こえる。農家の朝はとくに始まっているのだ。大きく深呼吸をしてから、雪乃は、やっぱり走りだした。

長靴ががぼがぼと鳴る。まっくろけえしててっくりけえることのないように気をつけながら、舗装された坂道を駆け上がる。ふだん軽トラックですいすい登る坂が、思ったよりずっと急であることに驚く。

息を切らしながらブドウ園の手前を左へ曲がり、砂利道に入ってなおも走ると、畑が見えてきた。整然とのびる畝うねの間に、紺色のヤッケ\*を着て腰

をかめる茂三の姿がある。急に立ち止まったせいで足がもつれ、危うく本当にてっくりけえりそうになった。

「シ……。」

(3) 張りあげかけた声を飲みこむ。

ヨシ江はあんなふうに言ってくれたけれど、ほんとうに茂三は怒っていないだろうか。少なくとも、すごくあきれているんじゃないだろうか。謝ろうにも、この距離ではどんなふうに切り出せばいいかわからない。

布巾でくるまれたおにぎりをそっと抱え、立ち尽くしたままためらっているとき、茂三が立ちあがり、痛む腰を伸ばした拍子にこちらに気づいた。

(4) 「おーう、雪乃。やーつと来ただかい、寝ぼすけめ。」

笑顔とともに掛けられた、からかうようなそのひとりで、胸のつかえがすうっと楽になつてゆく。手招きされ、雪乃はそばへ行った。

「ごめんなさい、シゲ爺。」

「なんで謝るだ。」

ロゴの入った帽子のひさしの下で、皺しわばんだ目が面白そうに光る。

「だってあたし、あんなえらそうなこと言つといて……。」

「それでも、こやって手伝いに来てくれただに。」

「それは、そうだけど……。」

「婆ばあさんに起こされただか？」

「ううん。知らない間に目覚ましを止めちゃったみたいで寝坊したけど、なんとか自分で起きたよ。」

起きたとたんに「げえっ」て叫んじやった、と話すと、茂三はおかしそうに笑った。

「いやいや、それでもてえしたもんだわい。いつつも、婆やんがぶつくさ言ってるだに。『雪ちゃんは、起こしても起こしても起きちゃこねえでおえねえわい』つって。それが、いっぺん目覚まし時計止めて、そんななお自分で起きたつちゆうなら、そりゃあなおさらてえしたことだでほー。」

「……シゲ爺、怒ってないの?」

「だれえ、なーんで怒るう。起きようと自分で決めて、いつもよりかは早く起きただもの、堂々と胸張つてりやいいわい。」

雪乃は、頷いた。目標を半分しか達成できなかったのに、半分は達成できた、と言ってくれる曾祖父のことを、改めて大好きだと思った。

「よし、そんなら手伝つてくれ。ジャガイモの芽掻きだ。ああ、いやその前に、まずはそれを食つちまえ。ゆつくり噛んでな。」

雪乃が手にしている布包みの中身がおにぎりだと、一目でわかったらしい。畑の端に座ってタラコと梅干しのおにぎりを食べながら、茂三の手もとを見守る。去年の十一月、骨にひびが入った手首はだいぶ良くなったようだが、無理な力がかかるとやはり痛むらしい。

ひと月ほど前、航介とともに雪乃も植え付けに参加した。半分にしたイモの切り口に草木灰をつけて乾かし、断面を下に、芽を上にして植えてゆくのだ。父親は別のやり方も試してみると言いつて、畑の奥半分は断面のほうを上にして植えていた。昔からあった方法らしいが、最近の研究では、このほうが収穫は遅くなるけれども病気にかかりにくいという結果が出たのだそうだ。

(5) お父さんもいろいろ勉強してるんだな、と思つてみる。自分にとって新しいことを始める時は、茂三のような大先輩の培つてきた知恵を素直

に受け入れることも大切だし、また一方で、すべてを鵜呑みにするのはなく、一旦は疑つてみることも必要なかもしれない。

よく噛んで、けれどできるだけ急いで食べ終えて、雪乃は茂三のそばへ行つた。一緒にジャガイモの畝の間にかがみ込む。

(村山由佳「雪のなまえ」による)

〔注〕 まつと——もつと。

ヤッケ——フードの付いた、防風・防水・防寒用の上着。

芽掻き——果樹、野菜等の発育を調整するために、不要な芽を、長く伸びないうちに指で取ること。

〔問1〕「……え？」とあるが、このときの雪乃の気持ちに最も近いのは、

次のうちではどれか。

ア ヨシ江がどのようにして、温厚な茂三に自分のことを放っておくと

言わせたのか、ヨシ江から聞いてみたいと思う気持ち。

イ 起こしてくれると約束していた茂三が、自分を置いたまま畑に行つ

たことが信じられず、ヨシ江の言葉を疑う気持ち。

ウ 茂三とヨシ江が、苦笑しながら自分を起こさずに置いていこうとする様子を想像し、悔しさが込み上げる気持ち。

エ 一緒に畑へ行きたいと伝えていたにもかかわらず、茂三が自分を放っておくように言つたと聞き、戸惑う気持ち。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 無言で洗面所へ走ると、超特急で顔を洗い、歯を磨き、部屋へ戻ってシャツとジーンズに着替えた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 早く出かけたというあせりから不安へと気持ちが変わる様子を、丁寧<sup>1</sup>に描写することで、説明的に表現している。

イ 自分の甘えに気づき急いで身支度する様子を、場面の描写を短く区切りながら展開することで、印象的に表現している。

ウ 遅れを取り戻したくて速やかに動く様子を、同じ語句の繰り返しとたとえを用いることで、躍動的に表現している。

エ 情けない思いで押し黙って出かける準備をする心情や様子を、細部まで詳しく描くことで、写實的に表現している。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 張りあげかけた声を飲みこむ。とあるが、このときの雪乃の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 畑まで急いで走ってきたため、思っていた以上に早く着き、茂三を驚かせようとして声のかけ方を決めかねている気持ち。

イ 畑で農作業をしている茂三のそばに駆け寄り、話しかけようとしたが、なかなか気づいてもらえず困惑する気持ち。

ウ 茂三が、自分に対してどのような思いを抱いているかつかみきれず、声をかけることをためらう気持ち。

エ 茂三が快く許してくれないと思うと、自分から声をかけづらく、気づくまで待つことでは誠意を示せないと思う気持ち。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 「おーう、雪乃。やーつと来たばかり、寝ぼすけめ。」とあるが、この表現から読み取れる茂三の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア きつと来るだろうと思いついて待っていた雪乃の姿を見付け、ちやかすような口調で、うれしそうに迎え入れようとする様子。

イ 雪乃が来たことを喜びながらも、普段から早起きが苦手なひ孫をもて余しているため、できるだけ反省を促そうとする様子。

ウ 身支度が遅いために待たずに置いてきたことを気にしていたが、雪乃が来たことを喜んで、照れ隠しでからかっている様子。

エ 遅れて畑に来た雪乃に対して、昨日の心無い発言は大目に見て、子供らしいことだと理解して温かく接しようとする様子。

〔問5〕<sup>(5)</sup> お父さんもいろいろ勉強してるんだな、と思ってみる。とあるが、雪乃が「お父さんもいろいろ勉強してるんだな、と思ってみる」たわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 今朝寝過ごしたことを思い返し、曾祖父母に起こされた自分をふがいなく思い、自立している父に学びたいと考えているから。

イ けがが治って精力的に働く茂三の様子を眺めながら、父の取り組みを振り返り、父が茂三を尊敬する理由を理解しようとしているから。

ウ 農業に興味をもち始めた自分が、父と茂三の行動を思い返し、経験に基づく茂三よりも研究熱心な父を手本にしようとしているから。

エ 茂三が用いた方法にとらわれない父の農作業の工夫を思い返し、新たな視点で、大人たちの姿について考えようとしているから。



次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

人間以外の動物の行動を観察すると、原始的なレベルではあるが、知的と呼ぶにふさわしい行為を行っていると考えざるを得ない場面に遭遇する。そうでなければ多くの動物が見せるかなり複雑な振舞い<sup>ふるまひ</sup>を説明できない、という意味である。例えばタイに生息するカニクイザルは、石を道具に使ってカニや植物の硬い殻を割って果肉を取り出す。対象ごとに石を変える。鳥でさえ、厚手の木の葉をむしって細長いヘラ状のものをつくり、それを道具として用いて、木の穴の中の虫をつり出して餌とするものがある。このような特殊なものでなくても、多くの動物の行動はでたらめなものではなく、一定の目的、例えば餌を獲るという目的を達成するために、一連の秩序だった必然的な行動を取っている。中には行動パターンとして見た場合、人間の子供より複雑なものもある。人間や動物という先入観を離れて、純粹に行為の知能性という点で見れば、知能の違いは計画的な行動の複雑さの違いに現れるものであつて、

人間と動物の間で本質の部分に大きな差はないと言える。（第一段）

動物の例を持ち出したのは、原始的人間と動物の間に大きな違いがないことを示すためであるが、同時に、言語以前の原始的人間の振舞いを直接観察することはできないが、動物は現代でも観察ができるし、人間に比べて動作パターンが少なく、かつ固定的なので、知的な行為の観察がしやすいからでもある。動物の行動目的の大部分は餌を獲ることと子孫を残すために異性と交配することであり、この目的を達成するため、多くの動物が、走る、跳ぶ、伏せる、飛ぶ、といった生物的機能として自然に備わった単純な行為を組み合わせて複合的な行動を行っている

る。でたらめに基本的な機能を組み合わせただけでは目的を達するような動きができるわけではないから、事前に行動の計画を立てているに違いない。これが行為の知能性である。（第二段）

しかし動物の行為を「考える行為」と言い切ってしまうには、どこか違和感のあることも確かである。動物では目的が限定的で、方法が固定されている。したがって、行動パターンも種ごとにほぼ固定されている。

動作が複雑で、知的に見えていても、それは個々の個体が考えてつくり上げるものではなく、種としての経験から、何代にもわたってつくり上げられたものを踏襲しているに過ぎない。したがって動物の行動パターンは親の代、さらには遠くさかのぼって先祖の代のものから大きく変わっていない。これに対し人間の場合は目的が多様であり、個人がそれぞれ自分の目的を持つ。そのための目的達成の方法を個人が状況に応じて動的に見いださなければならない。この「目的とその達成の方法を動的に見いだす」ことが考えることの本質と解釈すると、「考える」のはあくまで人間のみであることになる。動物における一見知的な行為は、その動物が個体として「考える」のではなく、種として先祖から受け継いだものであり、通常、「本能的」と表現される。（第三段）

動的に考えるかどうかは、概念の表現と記憶の方式に関連する。すなわちこの差は、現代の人間は概念の表現と記憶を言語というソフトウェアで行うのに対し、動物は生理的構造というハードウェアでそれを行っている、という構造的な違いによる。「既存概念による考え方」の原点が生理的構造にあり、言葉はその生理的構造のコピーと考えると、そして多くの人間が「既存概念による考え方」によっている事実を考えると、人間の「考え方」の基本部分の本質は動物の「本能的な行為」と実質的に大きな差がないように見える。（第四段）

これに対し「脱既存概念の考え方」のほうは動物的な「本能的な行為」とは異質である。新しく発想するという「脱既存概念の考え方」は、この点で、多くの人がそれで満足してしまっている「既存概念による考え方」とは一線を画している。「脱既存概念の考え方」こそが、人間でなければできないものである。社会的にも大きな変革が期待されるのはこの「脱既存概念の考え方」である。人には、目に見えていないことをイメージする能力があるのに、チンパンジーではそれができないと報告されているが、この違いが「脱既存概念の考え方」にとって本質的なものであるか、あるいはこれも、概念の表現と記憶を言語というソフトウェアで行っているためであるかどうかは、今のところはっきりしていない。しかし「考え方」も、神によって与えられたものであるよりは、「考え方」の知的進化の必然的結果である、とするのがより科学的な立場である。人間の場合、言語の発達によって、「考え方」も進化した結果、表面的には動物との違いが大きくなり、<sup>\*</sup>デカルト的な見方が表れたと解釈できる。以下ではこのことを明らかにしていきたい。(第五段)

何につけ、議論しようとしたら、まずその議論の対象はどのようなものかを定義しておかなければならない。「考える」ことについても同様である。(第六段)

「考える」にもさまざまなものがある。何かのきっかけでふと思いついた過去の一場面、まだ若かった両親に連れられて行った遊園地の情景、それから連鎖的に次々と心に浮かんでくる追憶の場面も「考える」ことの一種である。しかし、このような誰にとっても楽しく、何ら技巧を必要としないし、目的もない「考える」は、自然のままに任せるのがよい

だろう。以下で取り上げるのは、「考え方」という一種の技術あるいは方法を要するもの、である。これを、「目的達成の方法を動的に見いだす」ことであるとした。ただし、これは目的が与えられているときにその実現方法を考えるという、「考える」ことの一つの例である。一般にはこの形の「考える」行為が多いが、ときには、「何をすべきか」という目的のものについて考えることもある。学生が将来の進路を考える、政治家が国の繁栄のために何を為すべきかを考える、など、このような例も多い。(第七段)

これらは、たとえ漠然としたものではあっても何か目的意識のもとでの「考え方」であるが、人間として、あるいは社会人としてどのように考えるどのように生きるべきであるか、といった、さらに抽象的で高度な「考え方」もある。後者は「考え方」についての「考え方」といった意味合いのものを含み、知的機能のレベルで言えば、具体的な目的を持つ行為、言い方を変えれば即物的な「考え方」より上位のものである。突然、<sup>\*</sup>「知的機能のレベル」などと言ってしまったが、目下<sup>もっか</sup>の議論には直接関わりがないので、具体的な目的意識のもとでの「考え方」について考える。(第八段)

目的は、例えば「行動計画を立てる」や「新製品開発において」高性を達成する、「新しいビジネスモデルをつくる」などさまざまであり、「考える」対象や状況の違いによって「考える」内容は異なるけれど、どの場合でも共通しているのは、「考える」行為には必ず何らかの動機と目的や方法などその前提条件があることである。これは「考える」ことの一般的な条件であり、「既存概念による考え方」でも「脱既存概念の考え方」にも共通である。以下「考え方」についての議論では、目的が明確に意識されていることを前提とする。明確に、とは明文化されるほどに、という意味である。以下ではこれを「考える目的」のように表す。(第九段)

すでに触れたように、現実には多くの人は無意識に「考える」という行為を行っている。「考えを変えろ」と言われても、どのようにしたらよいかわからないのもそのためと言える。しかしそれでも人はでたらめに頭を働かせているわけではない。一定の手順を踏んで考えていることは確かである。この「考える」という行為を明示することによって、異なる「考え方」と比較したり、(もしできるなら)理想的な「考え方」を表現すること、また理想的な「考え方」に比べて実際に人が行っているのはその一部であること、そして足りない部分は何かをはっきりさせることができる。それにはまず、動機となっている「考える」目的を達成するように行われる行為のモデルをつくり、その構造を表現する。現実には、多くの場合、人は無意識に考えている。仮に意識していたとしても「考える」目的や、考える途中で得た概念をそのつど言葉に出すことはしない。<sup>(3)</sup>しかしそれを明示することによって、気付かなかった誤りや考え落ちを見だし、「考える」ことを変える根拠が見えてくる。また明示することによって「考える」ことのモデルがコンピュータ化される。人工知能という研究分野がこのようにして発展してきた。(第十段)

しかし「考える」ことのすべてを明示できるわけではない。大ざっぱな言い方になるが、「既存概念による考え方」は明文化のできる部分、したがってコンピュータ化ができる部分が多く、「脱既存概念の考え方」は明文化ができない部分、したがってコンピュータ化ができない部分を含んでいる、と言うこともできる。(第十一段)

(大須賀節雄「思考を科学する」による)

〔注〕 デカルト的な見方——デカルトは西洋の哲学者であり、デカルト的な見方とは、ここでは理性のある人間と他の動物を区別する見方である。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 人間や動物という先入観を離れて、純粹に行為の知能性という点で見れば、知能の違いは計画的な行動の複雑さの違いに現れるものであって、人間と動物の間で本質の部分に大きな差はないと言える。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 多くの動物は複雑に統制された行動をしており、人間が社会の中で規律正しく行動することと同じ程度の社会性があると考えているから。
- イ 動物の行動には定められた目的達成の方法があり、状況に応じて最適な方法で目的を達成する人間と質的な差はないと考えているから。
- ウ 多くの動物の複雑な振舞いは目的達成に向けた適切な行動であり、人間の本能的な段階の行動と根本的な違いはないと考えているから。
- エ 動物は状況の変化に応じて行動の目的を設定しており、人間の子どもと比較しても環境に適應する能力に大きな差はないと考えているから。
- 〔問2〕<sup>(2)</sup> これに対し「脱既存概念の考え方」のほうは動物的な「本能的な行為」とは異質である。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。
- ア 概念の表現と記憶の方式は人間も動物も同様の構造をしているが、新しい発想を生み出す革新的な知性は人間しかもっていないということ。
- イ 言葉に依存する人間の思考と身体構造に制限される動物の行動はどちらも本能的だが、経験に基づく人間の行動は異質であるということ。
- ウ 先祖代々変わらない種の性質を踏襲する点は人間も動物も類似しているが、目的と行為が固定されているのは人間だけであるということ。
- エ 人間も動物も代々受け継ぐ行為の形式があることはあまり変わらないが、創造的な思考は種として受け継ぐ行為とは質的に異なるということ。



〔問3〕 この文章の構成における第九段の役割を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第八段で規定された「考え方」を受けて、「考える」行為の目的とは何かを示し、筆者の主張の前提を明らかにしている。

イ 第八段で整理された「考え方」を受けて、「考える」ことに関する新たな視点と反対の内容を提示することで話題の転換を図っている。

ウ 第八段で挙げた「考え方」の具体的事例を踏まえ、「考える」内容を要約し、筆者の論の展開を分かりやすくしている。

エ 第八段で解説した「考え方」の種類を踏まえ、「考える」対象や状況を挙げて、一つ一つを説明し結論に導いている。

〔問4〕 <sup>(3)</sup>しかしそれを明示することによって、気付かなかった誤りや考え落ちを見いだし、「考える」ことを変える根拠が見えてくる。とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 一定の手順を踏んで「考える」過程を可視化することで、自分の考えを再認識し、目的につながる動機が見いだされるということ。

イ 「考える」目的や過程で得た概念を言語化することで、論理の不備や不足を明らかにし、思考を見直す手掛かりが見えてくるということ。

ウ 「考える」途中の要素から得た概念を明文化することで、思考が明確に整理されるため、無意識に考える必要がなくなるということ。

エ 人間の脳内で行われる「考える」手順を電子化することで、異なる考えを検索し、理想的な考えを永続的に保存できるということ。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「コンピュータ化できない人間の考え方」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。」

5

次のページのAは、平安時代末期の歌人西行の歌集「山家集」の和歌とその前に付され和歌を補足する詞書の原文であり、<sup>ことばがき</sup>内<sup>ありわらのみかひ</sup>の文章はその現代語訳である。B及びCは西行と平安時代初期の歌人在原業平の詞書に関する対談と解説文である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A 一院いちのゐんかくれさせおはしまして、やがての御所へわたりまゐらせける夜、高野たかのより出いであひて、まゐりあひたりける、いと悲しかりけり。こののおはしますべき所御覽おんらんはじめけるそのかみの御供おんともに、左大臣実能さねよし、大納言だいなと申しける、候さかはれけり。忍しのばせおはしますことにて、又人さぶらはざりけり。その御供にさぶらひける事の思おもひ出でられて、折をしも今宵こよひにまゐりあひたる、昔今むかしのこと思おもひつづけられて詠よみける

今宵こそおもひ知らるれあさからぬ  
君に契ちぎりのある身なりけり

一院いちのゐん(鳥羽法皇とばほう)が鳥羽離宮とばりき(鳥羽安樂寿院御所とばあんらくじゆいんごしょ)にお亡なくなりになつて、これからずつとお鎮しずまりになる御塔ごたにお渡りになつた夜、高野こうやを降くだつていた自分はその御葬送ごそうじやうに侍まへることができたが、たいへん悲しいことであつた。そもそも永くお住まいになるところとして鳥羽離宮を初めて検分遊けんぶんゆうばされたのは保延ほうえんの初め、あの時のお供には左大臣徳大寺実能さだていじが、まだ大納言の御身分ごみぶんで加かわつておられたが、おしのびの御幸みゆきのこととて、他の者はお供申し上げなかつた。その時、自分は北面武士めんぽふしとしてお供に加かわつていたが、その時のことなど自然に思おもひ出でされて来て、今宵こんせうは今宵で御葬送ごそうじやうに侍まへることのできた御縁ごゑんの深ふかさなどに思おもいを致いたし、昔のこと、今のこと、あれこれ思おもひは千々ちぢぢに乱れ、悲しみに濡ぬれて、次のような一首を詠よじた。

自分という人間はなんという迂濶うかつさだらう。鳥羽法皇御葬儀とばほうおうごそうぎの今宵こんせうになつて初めて、自分が院いんと並なみひと通りでない御縁ごゑんにあつたことを、今更いまさらのように深く思おもひ知り、思おもひ知らされたことであつた。

(井上靖「西行・山家集」による)

B 目崎めざき これほど長い詞書がふんだんにくつついている歌集は、そう多くないと思おもうんです。鳥羽法皇が亡なくなつたときの歌などは、「一院か

くれさせおはしまして、やがての御所へわたりまゐらせける夜、高野たかのよりいであひてまゐりあひたりける、いとかなしかりけり」云々うんぬん。ずいぶん長い詞書を書いて、

こよひこそおもひ知らるれあさからぬ  
君にちぎりのある身なりけり

実に単純といいますが平易へいぎといいますが曲まががないといいますが、ひとりごとを漏もらしたみたい、技巧ぎこうも何も入いっていない歌ですね。白しろ川の関かで能因のういんを回顧かへりした、

\* しらかはのせきやを月のもるかげは  
人の心をとむるなりけり

も、非常に詞書が長いのですけれど、歌そのものはどうってことはない。白しろ洲すでも、業平なりひらも詞書が多いでしょう。やはり古今ここんの序つらゆきで貫之つらゆきが言いつたように、心こころあまりて詞足ことばらずで、その足らない部分を詞書で補おぎなつたようなところがある。

目崎めざき ええ。そういう点でも共通したところがあるんです。あれもそういう点が大事だいじだと思おもうから、貫之つらゆきは『古今集』のなかに業平なりひらの歌に限かぎつて詞書を長ながいまま入れてある。西行さいぎやうの歌も、どうもそういう詞書と組み合わせ特徴とくごうが浮かうび上があがつてくるような。

白しろ洲す それで、自分のなかに長い歴史があるというように思おもつてほしい、読む人にね。

目崎めざき <sup>(2)</sup> そういう点では西行さいぎやうという人はたいへんな散文の達者たつしやだつたと思おもいますね。

白しろ洲す はい。<sup>(3)</sup> それで、いいんですね、この詞書が。だから、西行物語さいぎやうものがたりなんかできちゃうんでしょうけれども。

**目崎** 瀬戸内海を渡って四国へ行くときの歌、旅程をつぶさに詞書で

述べては、歌っておりますね。『山家集』のなかでも突然、あの部分が出てくるんですけれど、考えてみると、あれがもうちよつとまとまって書かれたか、あるいはもつと残っていたら、いわゆる紀行文のはしりではないか。『土佐日記』は別としまして、『海道記』『東関紀行』などのもう一つ前の、たいへんすぐれた紀行の作品になったと思うのです。西行はひとつの旅行記としてまとめるつもりはなかったんで、歌の詞書として書き留めるだけにとどまったようですから、惜しいことだと思のですが。しかし、日本の紀行には地の文章を書いては歌を一首入れ、それからさらに進んでいくというパターンができていますね。西行は十分、その先駆者と見られるものだろうと思うのです。白川の関、信夫の里から、平泉までの部分も。

**白洲** (4) 一つの独立した旅行記みたい。

**目崎** 平泉の、

\* とりわきて心もしみて冴えぞわたる  
衣河見にきたるけふしも

の歌の詞書、「十月十二日平泉にまかりつきたりけるに、雪ふり、あらしはげしく、ことのほか」云々。

**白洲** あれはいい歌ですね、実にいい歌ですね。

**目崎** これなどは本当に詞書と歌とがえもいわれず溶け合ひまして、ハーモニーができていますね。

(白洲正子、目崎徳衛「西行の漂泊と無常」による)

**C** 「西行上人談抄」には、西行の詞として、「歌はうるはしく可詠也。

古今集の風体を本としてよむべし」といった後で、手本とすべき歌をあげた中に、業平も入っている。それは極く常識的な説にすぎないが、都の内を外を放浪していた頃、わざわざ惟喬親王の邸跡を訪ねたことは注目に値する。

その頃、西行は修学院に籠っていたが、昔、惟喬親王が出家して、洛北大原の小野殿に隠棲していたところを見に行つた。半ば崩れかかった釣殿や、池に橋が渡してあるのを、「絵にかきたるやうに」興味深く眺めたが、滝が土に埋もれて、そのまわりの木が大きく育ち、松の音のみ聞えるのが身にしみた、と詞書に記している。

滝落ちし水の流も跡絶えて

昔語るは松の風のみ

この里は人すだきけん昔もや

さびたることは変らざりけん

「人すだきけん」は、人が群がっていたという意味で、その頃でも寂しい住居であることに変わりはなかったであろう、と詠嘆したのである。

だが、西行はただ惟喬親王の遺跡を見物に行つたのではなかった。西行が物見に行く時は、必ずそこに人間の歴史があり、名歌が遺されているからで、このことは、大覚寺や広沢の池の場合をみてもわかることである。それは歌枕とは関係がなく、まったく個人的な興味に出たものであった。

小野殿の跡は、大原を見下ろす高台にあり、今は畑になっているが、背後の森の蔭には、惟喬親王の墓と称する五輪塔(おそらくは供養塔)が、ただ一基建っているだけである。業平は、大雪の日にここを訪れ、忘れ

ることのできない絶唱を遺した。

忘れては夢かと思ふおもひきや

雪踏みわけて君を見んとは

これには長い詞書がついており、惟喬親王が剃髪して、ひとり寂しく暮していられるのを見て、都へ帰った後、贈った由が記してある。

一首の意味は、親王が出家なされたことをふと忘れて、深い雪を踏みわけてお目にかかってみると、夢のような気がいたします。——大体そういう意味のことであるが、「夢かと思ふおもひきや」と、二句目を字あまりとし、同じ詞を重ねて切羽つまった気持ちを表しており、そこからはしんしんと降りつもる雪の音と、悲痛な叫び声が聞えて来るようである。

紀貫之は「古今序」の中で、「在原業平は、その心余りて、詞たらず」と評した。

「忘れては」の歌は比較的わかりやすいが、中には説明不可能なものも少なくない。何といたらいいのか、感情があふれて、詞の流に身をまかせてしまうようなところがあり、そういう歌ほど美しいのだから矛盾している。紀貫之のような専門歌人からみれば、三十一字の形式の中で完結しないような歌は、認めたくなかったのだろうが、業平の歌はそれなりに完結しており、よけいな解説を受けつけないものがある。したがって、どのようにも解釈できるし、読む人の心次第でどこまでも掘がって行く。ほんとうの詩人とはそうしたものだろう。だが、詞が足らないことも事実なのであって、そこで長い詞書を必要としたのである。

詞書が多いことでは、西行も人後に落ちない。現に小野殿をおとすれた時の二首も、長い詞書をともなっており、今まであげた歌のほとんどに、それを詠んだ時の状況や理由を補足する文がついている。西行もまた、「その心余りて」、詞が追いつけなかったのだ。時にはあまり多くのこと

をつめこんで、歌の姿を壊すことなきにしも非ずであった。その大部分は若い時の作だが、字余りの句が多いことも、西行の特徴の一つである。それについてはあまり深入りしたくはないが、字余りの句を研究していた本居宣長は、西行の歌はルールからはずれるので、聞き苦しいといつてとらなかつたという。

5) そういう次第で、業平も、西行も、詞書の助けを必要としたのであるが、詞書自体が美しいことも忘れてはなるまい。その長い詞書から、前者には「伊勢物語」が生れ、後者には「西行物語」が作られて行った。

(白洲正子「西行」による)

#### 〔注〕

北面武士——院御所の北方で、警護に当たる武士のこと。

能因——僧侶、歌人。

しらかはのせきやを月のもるかげは人の心をとむるなりけり——

白河の関に来て泊まったが、関屋を守る人も居らず、ただ月光が荒れた建物を漏れているだけである。が、それに却って、旅人である自分の心は引き留められてしまう。

『海道記』『東関紀行』——中世の紀行文。

とりわきて心もしみて冴えぞわたる衣河見にきたるけふしも——

長く心にかけていた衣川を見に来た今日という日は、とりわけ心も冷えわたり冴え返っている。

まかりつきたりけるに——着いたが。

西行上人談抄——西行の弟子による西行の歌論書。



歌はうるはしく可詠也。古今集の風体を本としてよむべし

——和歌は美しく詠むべきである。そのため古今集の和歌を手本とするべきである。

惟喬親王これたかしんのう——在原業平と親交があり、晩年を小野殿で過ごした。

剃髪ていはつ——出家のために髪をそること。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 御縁とあるが、Bに引用されている和歌において「御縁」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア こよひこそ

イ おもひしらるれ

ウ あさからぬ

エ ちぎり

〔問2〕<sup>(2)</sup> そういふ点では西行という人はたいへんな散文の達人だったと思いますね。という目崎さんの発言が、この対談の中で果たしている役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 西行の和歌と詞書との関係について自分の見解を示すことで、白洲さんの考え方との相違点を明らかにしようとしている。

イ 白洲さんの西行の詞書に対する評価を受け、新たな視点で業平と西行の詞書における関連性を整理しようとしている。

ウ それまでに語られた業平と西行の詞書の特徴を踏まえ、西行の詞書に話題を焦点化して対談の内容を深めている。

エ 白洲さんの読み手を意識した発言を受け、西行と業平の和歌と詞書の違いについて自説を展開するきっかけとしている。

〔問3〕<sup>(3)</sup> Bではそれで、いいんですね、この詞書が。とあり、Cでは

<sup>(5)</sup> そういう次第で、業平も、西行も、詞書の助けを必要としたのであるが、詞書自体が美しいことも忘れてはなるまい。とあるが、B及びCで述べられた西行の詞書の特徴を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア あふれる感情を歌だけでは表現しきれず、織り込みきれなかった和歌の技巧を全て詞書に挿入している。

イ 歌の背景を述べた詞書が、歌に詠まれた世界を補いながらも文章自体が読者をひきつける魅力を備えている。

ウ 字数の限られた和歌と散文である詞書を組み合わせることで、物語とすることが意識されている。

エ 詞書に用いる言葉が精選されており、和歌同様に短い文章で幅広い表現がなされている。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 一つの独立した旅行記みたい。とあるが、ここでいう「独立した旅行記みたい」を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 『山家集』には、旅の様子が描かれた地の文章に合わせて歌を詠むといった、伝統的な紀行文の形式で書かれた部分があるということ。

イ 平泉に強い思い入れがあった西行は、そこで優れた和歌を数多く詠み、その和歌が『山家集』にとりわけ多く残されているということ。

ウ 西行は、優れた文章表現で旅の記録を多く残しており、その中には和歌のない旅行記の形式で書かれたものも含まれているということ。

エ 西行は、旅する歌人の一人として多くの歌を詠んでおり、旅行記の第一人者としてその後の紀行文の定型を整えようとしたということ。

〔問5〕 CのA～Eの「の」のうち、他と意味・用法の異なるものを選び、記号で答えよ。